

「女性蔑視発言」を考える

大津 隆文

今年二月の五輪組織委・森会長の発言を巡って世の中が大きく揺れた。発言の概要は「女性がたくさん入っている理事会は時間がかかる」とのことだった。私は謝罪、撤回すれば事態は収まると思ったが、内外の批判は燃え盛り氏の辞任にまで至った。

私自身の感度の鈍さ、世間とのずれを反省し、頭を整理してみた。

まず、「時間がかかる」というのが事実かどうかである。この点はほとんど問題とならず、事実であろうとなかろうとアウトということだ。

内容が女性を「蔑視」している点が最大の問題である。では「女性が多い理事会は雰囲気が良い」といったプラス評価だったら許されるだろうか。多分それもアウトであろう。そのような発言は男性を基準にして女性を評価しているからだ。男性、女性と一括りにした見方、男性上位の社会構造が問題の本質ではなだろうか。

オリンピックの競技種目は男女別になっている。また、平均寿命は通常男女別に出される。こうした生物的な差異（セックス）は認められる一方、社会的・文化的な差異（ジェンダー）は認められないのだ。話が長い短いというのは、男だから女だからというのではなく、発言者個人の特性として認識すべきということであろう。

今回は国際的な批判も強かった。ジェンダーについては各国それぞれ歴史的、文化的背景があり、社会に染みついた男女観（差別）がある。世界の国々はそれを乗り越え、ジェンダーの平等を実現しようと今懸命に努力している。それだけに日本はのんびりし過ぎていると見られたのだろう。

と整理はしたものの、私には「○○子さん」という場合、一人の人間というより女性というイメージが不可避的にわいてくる。そして、「優しい」「厳しい」という人柄も、女性だから女性にしては、との思いを伴ってくる。救いがたい！

また、先日見た短歌に「マスクして女が眉を動かし媚を売る」という趣旨の作品があった。女が三人集まると姦しい、と漢字を覚えたりもした。何故女なのか、根はとても深い。